

常射之卷

三

一貫流射術常射之卷三

目錄

矢室之部

矢籠制

射手矢籠
制異制
矢籠
尾花
籠

矢籠箭盛樣

圖六品

弓尻籠付樣

圖一品

矢筒制

矢筒抱樣

空穗

空穗弓付樣

圖一品

土俵空穂

圖
一
品

荷矢箱

一貫流射術常射之卷三

矢室之部

矢籠制

射手矢籠擲矢籠尾花籠
勿矢籠異制矢籠圖九品

流傳曰矢籠ト云名穰ハ温故之卷ニ述ル如ク古

今著聞集義經記太平記庭訓往来等ニ見エタリ

其外小笠原家ノ古書三議一統高忠聞書ナトニ

モ矢籠ノ名ハ出タレトモ古代ノ矢籠ト云モノ

、製ハ詳ナラス逸見家ノ書ニハ総而矢ヲ刺ス

器ヲ矢籠ト呼フ事往古ヨリ有之唱ヘ也トアリ

又伊勢貞丈先生ノ説モ是レナリ今當ノ矢籠ト

云モノモ何レ頃ヨリ存在セシニヤ其時代モ詳

ニ知レス今當世ニ有ル所ノ矢籠ハ治乱兼用ヲ

エミタル矢室ニテ的場ニ臨ム時弓ニ莊附テ持

弓ニ付様つぼ或ハ旅行ニ弓臺ト云モノニ組合テ持シ

下ニ出ス弓臺ノ下ニ又組尋常ナラサル急変アル時ハ取

テ腰ニ付戰場ノ庭ニハ勿論矢ヲ盛テ帶スルヲ

便利トシタル矢室ナリ其制モ種々異製アリテ

一様ナラス則逸見ノ弓書ニ中頃ヨリえびらうつぼ箠等ノ

外ニ矢籠ト云モノヲ工作シテヨリ後來種々ノ

形チヲ撰ヒ射手尻籠尾花矢籠はね勿矢籠杯呼フモ

ノ多シ何レモ舊制ノ物ニ非ラサル故へ別ニ古
式ノ義無之也ト見エタリ此射手矢籠尾花尻籠
芻矢籠等ニモ小異アリテ其製同シカラス三品
ノ外ニモ竹矢籠ト云モノアリ其外異品少カラ
ス悉々利害得失損益アレハ左ニ其圖ヲ顯シテ

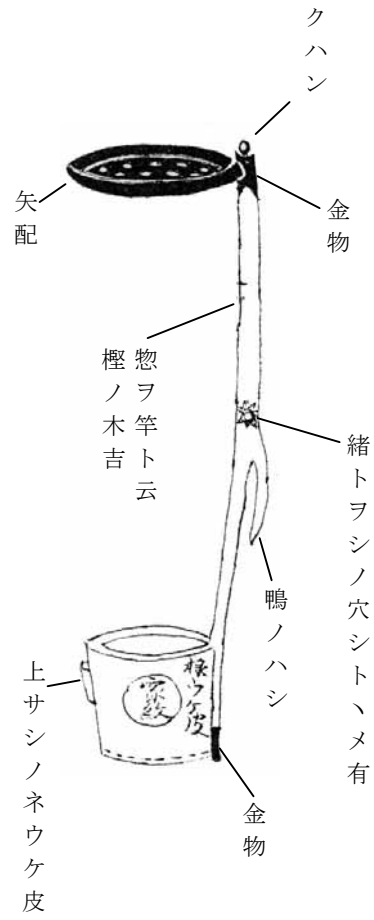
ヨリ

評註ヲ加ヘタレハ熟見シテ其利害得失ヲ哲へ
シ第一ニ掲ル所ノ圖ハ射法一統ニ出シタル射

手矢籠ノ圖ナリ

但シ射法一統ニ射手矢籠芻矢
籠ニ品ノ圖ハ出シタレトモ矢

籠トノミ記シテ何ニ矢籠トモ不記圖ニテ見ル
ニ射手シコナレハ此所ニ摸写シテ其評註シタ
リ考
ヘシ



右ニ摸写シタルハ射法一統ニ見エタル圖ニテ

射手矢籠ナリ此圖ヲ以テ其製ヲ見ルニ矢配ハ

廻リテ鉄ニテ作リ此釣ハ能ク鍛タル鉄ニテ厚サ
一分余リヨリ一分半位幅二分

余リニシテ飯櫃形ニシ此鉄釣ヲ和革ニテ包ミ
容易折レ曲ヌ様ニ可作

タルモアリ或ハ塗タルモアレとも圖ニテハ詳ナ

ラス煉皮ヲ此飯櫃形ニ作りタル輪ノ中ニ入レ
矢ヲ刺ス料ノ穴ヲ明ケタルモノナリ穴ノ数圖
ニ八九ナレトモ七九拾一十三モ明タルモアリ
其人々ノ覚悟ノ矢数ニテ一樣ナラス是ヲ矢配
ト云ハ名義ノ如ク矢並ヲ此所ニテ配分セル故
ニ斯ハ云ヒケン又腰木ヲ竿ト記シテ櫛ノ木吉
トアリ此矢籠ニカキラス何ノ製ノ矢籠ニテモ
腰木ハ櫛ノ木ヲ可トスヘシ射手矢籠ノ腰木ハ

上ヲ丸ク

指渡シ上ノ小口ニテ五六分位長ハ其
主ノ矢束ニ順テ長短不定鬪射之卷ニ

出シタレハ削り次第々々ニ平ミヲ付半端帶指
ナカハ
合見ルヘシ

ノ邊ニ至テハ格別幅廣帶指ノ上シト、メ穴ノ所ニテ一寸余見斗ニス

ヘシ丈夫ナル作り帶指ヲクリ込是レヨリ下ハ

又細クシテ根請皮ヲ取付ル辺ハ角ニ削リ内ニ

ナル方ニ皮二枚ノ厚サ押シ金物ヲ打ホト一段低

三分通位スキ取り根請皮ヲ付ル料トスヘシ又

緒ヲ通シノ穴トアルハ腰緒ヲ通ス穴ナレハ腰

緒ヲ通シ自由自在ニ遊アソブホトノ穴ヲ明ケヘシ腰緒

ノ太サ其人ノ矢ノ筈巡ノ寸ノ太サニスヘシ當流ノ高計也シト、メハ義莊

入タルモノニテ好ミヨルヘシ又帶指ヲ鴨ノ觜はし

ト註シタリ此所ノ先鴨ノ口觜ノ形ニ能ク似タ

レハ斯ハ呼タレトモ好事ノ者ノ施シタル名稱
ト知ヘシ此圖ノ製ハ不可ナリ上帶ニ拔指スル
ニ手間取リテ不便利ナリ先ヲ外ナリニ少シ勿
サセタルカ指拔便利ナレハ此製ヲ可トスヘ勿
矢籠ノ圖ニテ見ルヘシ此帶指ヲクリ込ミタル所
ヨリサケ割レテ損シ易ケレハ此所ニ胴金ヲ入
胴金ノ上下ヲ割籐ニテ卷キ堅固ニスヘシ又根
ウケ皮トハ二重皮ニシテ内ノ皮ト外ノ皮トノ
間ニ鏃ヲ指込タル故ニ斯ハ呼ヘケン此所ハ牛
滑皮ニテ作り其主所好ニ任セ赤クモ黒クモ青

クモ漆ニテ塗^リ金伯ニテ紋所或ハ上下ニ雲形ナ
ト置タリ稀ニハ白革ニ金紋雲形ナト付タルモ
アリ一様ナラス此根請皮ノ取付様圖ニテハ詳
ナラスト云^ト下ニ少キ金物ノミ見ヘタルハ下
ハ此金物ニテ留メタレ^ト上ハ如何シテ留タル
ニヤ見定メカタシ多分幅三分位ノ板金ヲ下ノ
方ニテ折曲ケ左右ニテ挟ミ鋸閉ニシタルモノ
ナリ尾花矢籠ノ圖ニテ知ヘシ又上指ノ子^ねウケ
皮ヲ別ニ儲タレ^ト射手矢籠ニハ別ニ不儲根請
皮ニ指様ニシタル制ナリ此矢籠ノ制ハ腰ニ付

テ便利ナルヲ專ラトシタル矢室ナレハ弓胞弦

挾ノ金物ナトモ無之質素ナル制ナリ又金物所

何金トモ不記其人々ノ所好ニヨリテ金減ナリ銀

赤銅四分一火色真しんちゆう儉ナト定リナシ又頭ノ金物

ニかなわ鑲ヲ付タル圖ナリ此クハンハ何ノ利用アリ

テ此所ニ打タルニヤ其利用ヲ知ラス矢からみ搦ノ緒

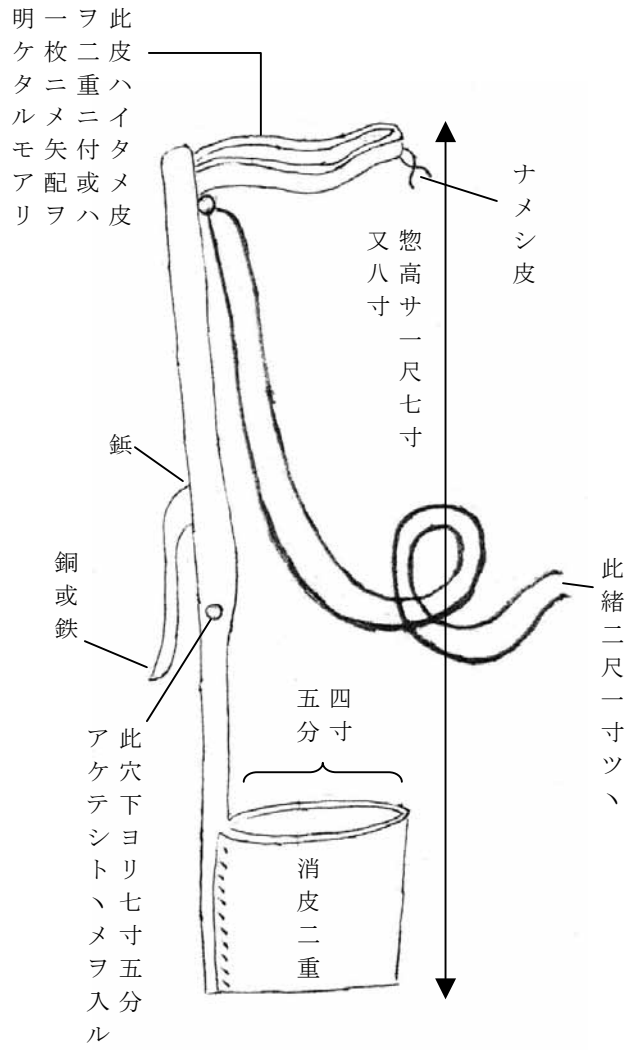
ヲ付ヘキ爲ノ料ナレハ矢配ヨリ下内ノ方ニ打

ヘシ頭ニ打テハ其用ナシ但シ矢配ヲ儲タル製

ニハ緒ヲ以テ矢ヲ搦サルヲ便利トシタレハ此

クハンハいよこよ彌不用ノ物ト知ヘシ又竹林流派弓書ニ

出タル射手矢籠ノ圖ハ小異アリ左ハ頭ス



右ニ頭シタル圖ハ竹林派流ニ射手矢籠ト記シタ

ル圖ナリ前章ニ出シタル射法一統ノ射手矢籠

ノ制トハ小異アリ此製ハイタメ皮ヲ以テ矢配
不儲鍛鉄ノ厚一分五六厘幅三分位ノ弦鉄ヲ飯

櫃形ニ作り此弦ヲ割藤元結細キ針金ナトニテ

卷キ漆ニテ塗り針金ハ真偷ナトニテ引タル糸
ハリ金ト云モノナレハ塗ニ不

及卷キタルマ、ナリ
但シ針金卷ハアシ、小キ打糸ニテ矢ヲ搦ヤウ

ニシタル製ナリ則一枚ニシテ矢配ヲ明ケタル

モアリト記シタルハ此製ノ如クナラスシテ前

ニ出シタル矢配ヲ付タル刺矢籠ノ製ヲ云タル

ナリ如此打緒ヲ以テ搦タレハ起倒進退或ハ組

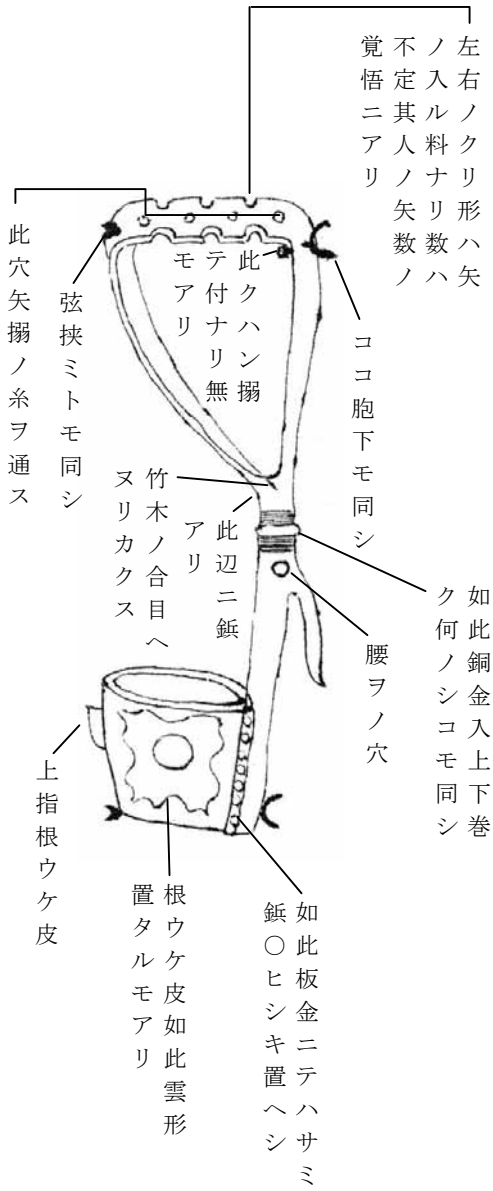
討ナトニ容易矢ノ抜落ル煩ナク至テ全利ナレ

ハ射手ノ用ヘキ矢籠ト云意ニテ是ヲ射手矢籠
トハ名呼シタリ又一名搦^ミ矢籠トモ云ナリ但シ
帯指ヲ銅或ハ鉄ニテ作り鋸留ニシタル製ナレ
ト不^{とも}丈夫ニテ不可ナリ用ヘカラス又腰緒ノ穴
ヲ帯指ヨリ下ニ明タレトモ是モ不可ナリ矢張
帯指ヨリ上ニ明タルヲ可トスヘシ又尾花矢籠
ト云モノアリ其製ハ鯨ノ^{ひれ}鰭或ハ割竹ヲ幅一寸
五六分ニシテ本末ノ幅ハ腰木ノ分相ニ順テ挟
ク削リ落シ腰木二本末ヲ鋸ニテ閉付漆ニテ塗
カクシタルモノナリ其外腰木根請皮金物等ハ

射手矢籠ニ異ナラス但シ此矢籠ニハ弓胞弦挟
ノ金物ヲ儲タリ竹林派流ノ弓書ニ弓臺ニ張立一
張立ノ圖ヲ出シテ尾花矢籠ト記シタレとも是ハ
誤ナリ用ヘカラス又詞書ニ射手矢籠勿矢籠ニ
限ラス銀ノ金物ヲツカフタルヲ尾花尻籠共云
傳タリトアリ是等ノ妄談少カラス金物ハ滅金
ニテモ銀ニテモ赤銅ニテモ四分一ニテモ銅ニ
テモ其外何金ニテモアレ金物ヲ以テ呼ニハア
ラス射手矢籠ハ射手矢籠ノ制アリ勿矢籠ハ勿
矢籠ノ制アリ尾花矢籠ハ尾花尻籠ノ形アリテ

其製皆異リテ三品別物ナリ左ニ出ス尾花尻籠

ノ圖ニテモ分明ニ知ヘシ



右ニ摸シタル畧圖ニテ其製ヲ辨ヘシ此矢籠モ

緒ヲ以テ矢ヲ擲ミタレハ容易矢ノ抜落サル事

ナリ利用ナリ其擲様ハ射手矢籠ニ異ナラスト

知ヘシ又勿矢籠ト云モノアリ此物モ少シツ、

小異アレトモ大同異ナラス其製ハ帶指ヨリ上

四五寸ホト腰木ヲ長クシテ是ヨリ末ハ鯨ノ鰭

ヲ幅五六分厚^サハ三分位ニシテ長^サハ其人矢束ニ

應テ高計^{鬪射之卷}アレハ長短不定ト云トモ大

ニ出タリ

概一尺ハカリ腰木ト此鯨ノ取合ハ管金物ニテ

續キ鯨ノ先ニ金物ヲ冠セ此金物ニ上矢ヲ刺シ

通スホトクリ込ミ其先ニ弦挟ヲ作り金物ノ下

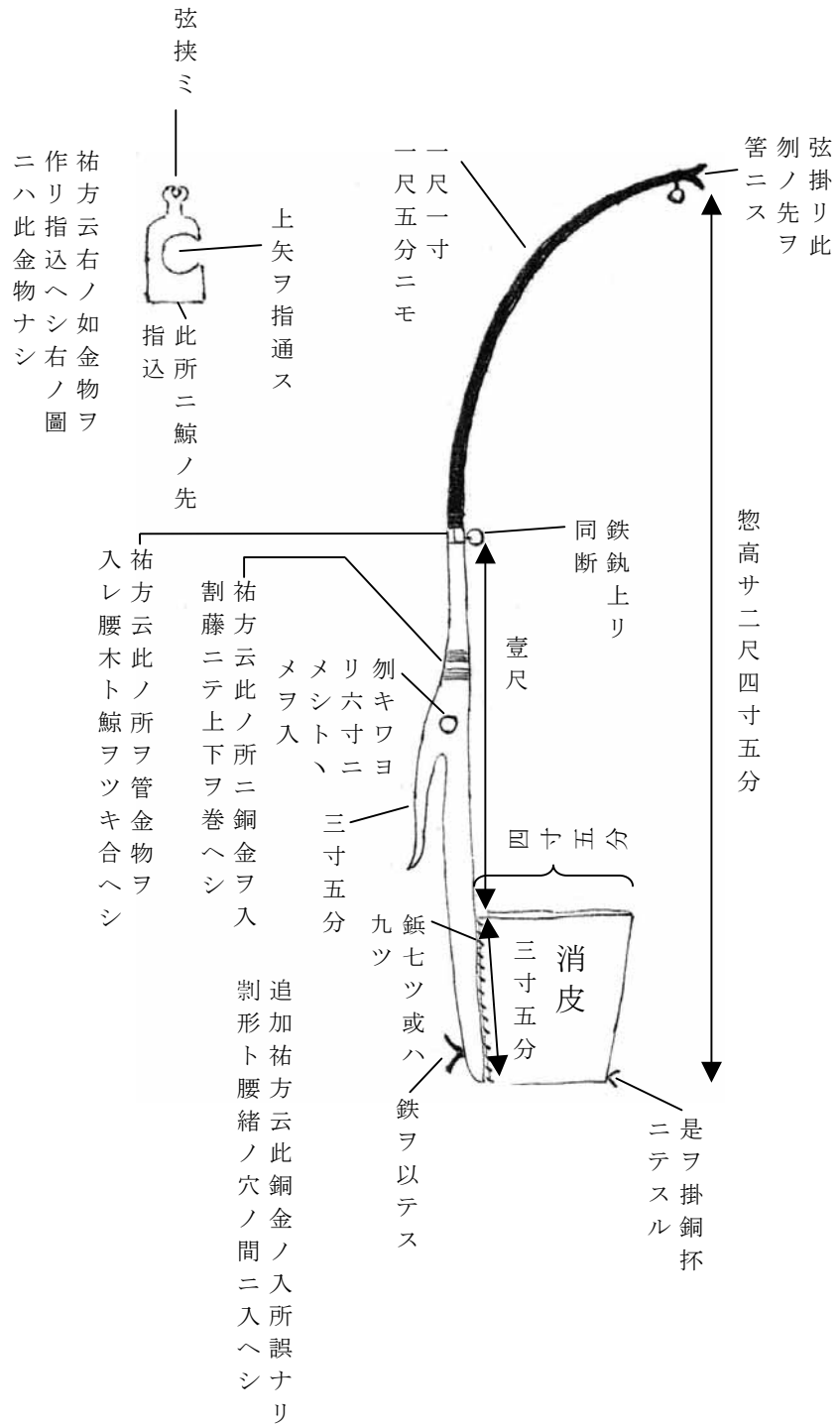
ニナル方ニ小キ丸^{くはん}鑲ヲ打又腰木ノ内ノ方ニモ

小キ丸鑲ヲ打^{此クハン打所ハ鯨腰木}此クハ

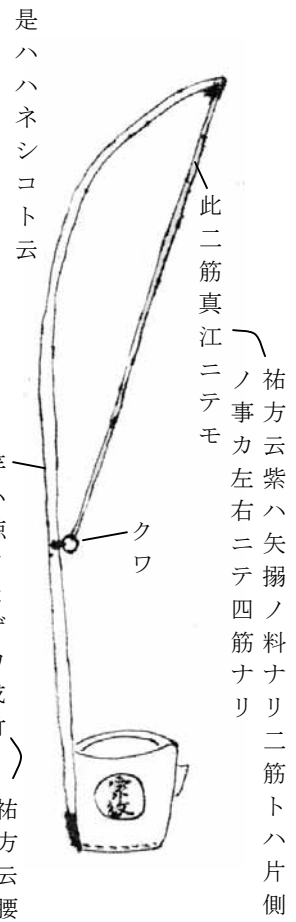
ヲ續合タル金物ノ下ニ可打

ンニ筆軸ヨリ小キ打緒ヲ結付上ノクハンニ引
通シ引シメレハ鯨タハくト曲ミ弓ノ如クナリ
又其緒ノ端ヲ本ノ鑲ニ通シ兩端取違へ引ホト
キニ結ヒ置キ此引張リタル緒ヲモシリテ矢ヲ
ハサミテ己カ思矢数ナト搦ムナリ上指ハ彼ノ
クリ形ヨリ指シ通ス製ナリ其余所ハ尾花矢籠
ニ異ナラス左ニ一二品圖ヲ掲タレハ圖ニテ其
製ハ知ヘシ

竹林派ノ弓書刳矢籠ノ圖

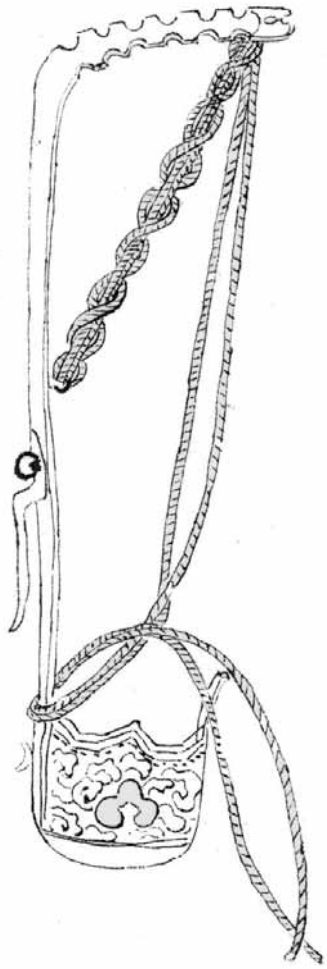


射法一統刎矢籠ノ圖



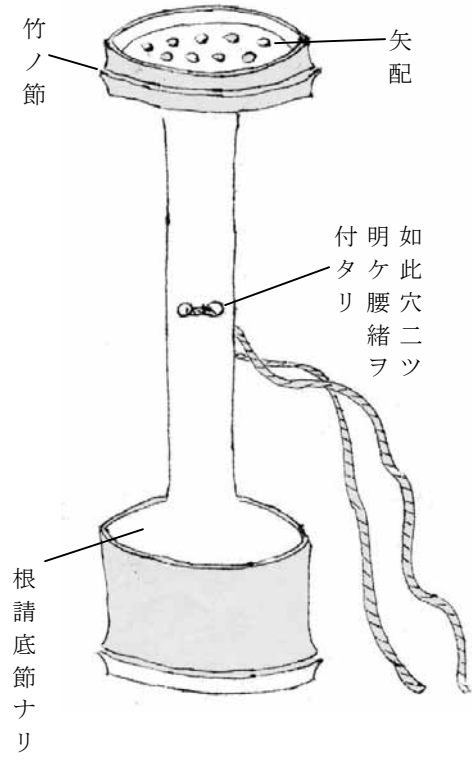
祐方云腰木ヲ用ヘス
本ヨリ末迄鯨竹ニテ
作タリ異制シコナリ

武用辨畧矢籠ノ圖



右第一二掲タル圖ハ尋常ノ芟矢籠ノ製ナリ第
二ノ圖ハ腰木ヲ不用鯨ノヒレ或ハ竹ヲ以テ腰
木ノ所モ作りタル制ナリ第三ノ圖ハ芟矢籠ノ
一種ナレト異制ノモノナリ惣而芟矢籠ノ類ハ
矢ヲ射盡シタル時腰ニ付ナカニ矢ヲ盛ニ便利
アレト建跪踰躡組討ナト矢ノ拔落ル煩アリ是
一得アレハ又一失アリ用不用ハ其人ノ覺悟ニ
アリ實ニ死活ノ場ト云ヘシ又竹矢籠ト云モノ
太平記ニ見ヘタレトモ其制詳ナラス今當ノ竹
矢籠ト云モノハ大竹ヲ節ヲコメ矢配ノ穴ヲ明

ケ根ヲ指込ム所ハ長二寸余リ底ニ節ヲ残シタ
トヘハ花生ノ長キカ如クモノニテ決テ實事ノ
モノニハアラスト知ヘシ左ニ便見ノタメ圖ヲ
顯ス

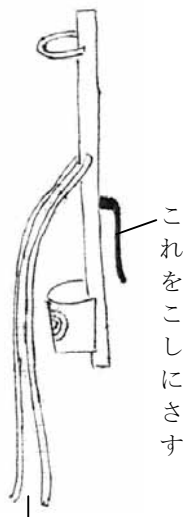


右ニ摸シタル所ハ竹矢籠ノ圖ナリ射手矢籠ヨ

リ此竹矢籠迄七品ノ外ニモ異制アリテ品類少

カラスト雖是ヲ掲ルニ違いとまアラスト知ヘシ 祐方云異

制ノ矢籠二品
爰ニ追加ス



これをこしにさす

此外色しの製作なり

此緒にて矢をからむ

今世の矢籠其形さまざまあり一様ならず

祐方云此圖ハ貞丈雜記ニ見タリ異制矢籠ニテ何ニ矢籠
氏記シナケレハ其名ハ不知腰緒ヲ以テ矢ヲ搦ハ如何
シテ付タルモノニヤ其付様矢搦様等ナケレハ不詳
思ニ怪便ノモノトモ不見正物ヲ以テ利害試度モノ也

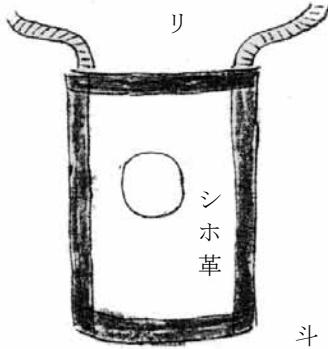
此所左右同シ

此所穴明ル

一寸下テ
弦取付ル

此腰木長サ
一尺八寸

根箱真向ヨリ
見タル所



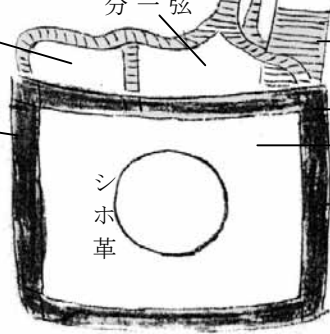
シホ革

此弦ハ鉄ニテ
作リ藤ニテ卷
ツムル

此所弦
ノ間一
寸五分

シンチウ

此間
六分斗



シホ革

如^レ此^ノ四^方ニ^金ノ
箆^ノコ^トク^ニシ
テ^中ハ^一枚^革ニ
テ^スル^也

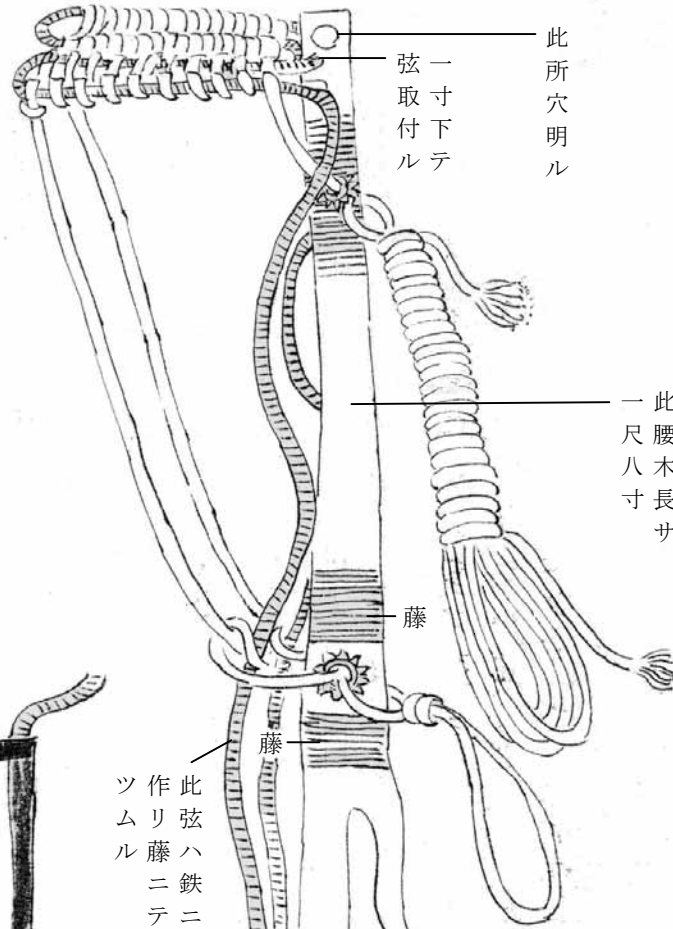
シンチウ左右
四本アリ

根箱ノ高サ四寸
三分同出四寸斗

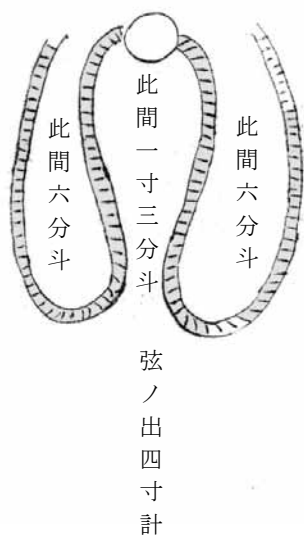
藤

藤

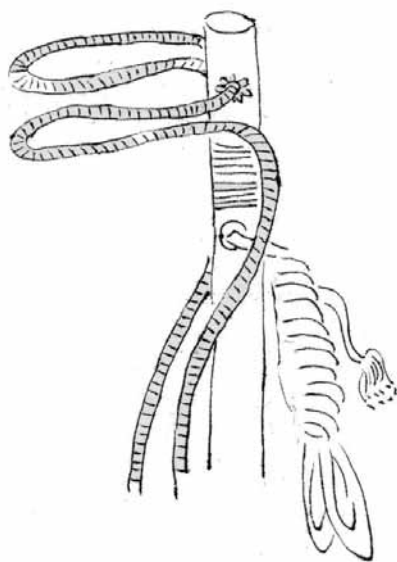
藤



祐方云右ニ圖スル矢籠ハ殊ナル異制ナリ
 政在先生死後ニ保坂氏ヨリ弓書不殘送リ



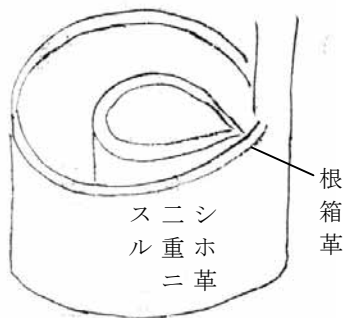
弦真向ニ見タル圖



ソコニテ出
 ノ寸三寸八
 分斗
 横二寸三分
 計
 上ノ小口ニ
 テ二寸五六
 分



シンチウ



タル文庫ノ中ニ有リタル押形ナリ此圖ハ
本證出所等ハ詳ナラスト云氏忠夫先生ノ
筆跡ニテ精ク記サレタレハ其製詳ニ見ヘ
タリ糸ヲ以テ矢ヲ搦ミタルシマナレハ容
易矢ノ拔落ル煩ニナク至テ利用ナル製ト
思レタリ則矢搦ノ圖モ記サレタレ氏下条
ニ追加ス見ヘシ案ルニ射手矢籠ノ一種ニ
テ是モ搦ミ矢籠ト云ヘキモノナランカ能
知ラン人ニ
尋問ヘシ

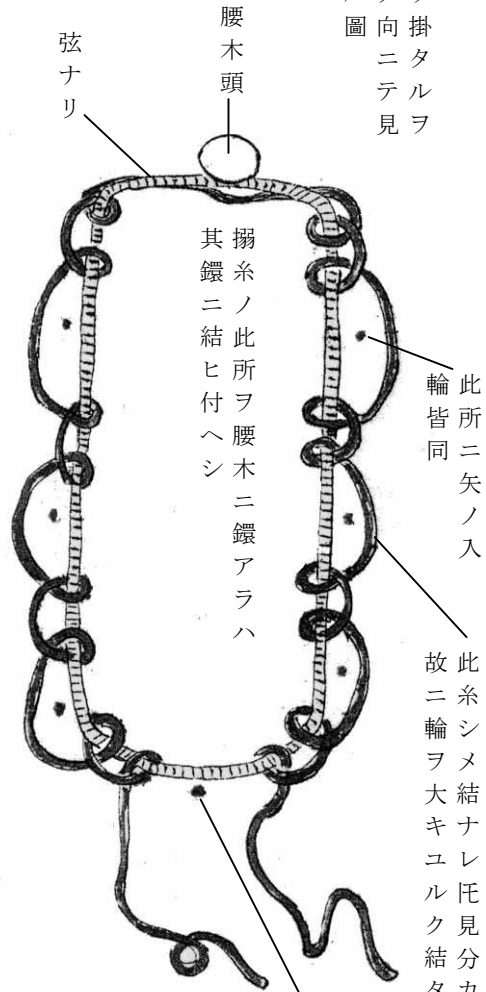
矢籠箭盛様

流傳曰矢籠ニ矢ヲ盛ルトハ矢ヲ指スことト云ナ
リ其製ニヨリテ矢ノ盛リ様異タリ矢配ヲ付タ
ル製ニハ上ヨリ矢先ヲ指込ム迄ノト変ニテト慥ヒ
ナシ糸ヲ以テ搦ム制ニハ其品ヨリテ異ナレハ

左ニ悉々圖ヲ掲タレハ其圖ヲ以テ辨知ヘシ又
矢数ハ上指一筋中指六筋以上七筋也或八九筋
十一筋稀ニハ十三筋ナトモ盛ナリ増減ハ其人
ノ覚悟ニアリテ定ラス射術不案内ノ族ハ七九
十一ノ矢数ニテハ頼ミ少ニ思ヒ矢数ヲ欲スレ
トモ防矢ナト射ル時ハ別論一己ノ勝負ニハ此
七九十一ノ矢数ニテ事足タリ此所覚悟ハ實事
正路ノ射術ヲ學ハスンハ會得成カタシ今日ノ
的射ニ中ニカ、ワリタル名聞虚躰ノ射人ノ知
ヘキ所ニアラス思惟スヘシ

射手矢籠箭擗様

糸ヲ掛タルヲ
真ノ向ニテ見
タル圖



擗糸ノ此所ヲ腰木ニ鑲アラハ
其鑲ニ結ヒ付ヘシ

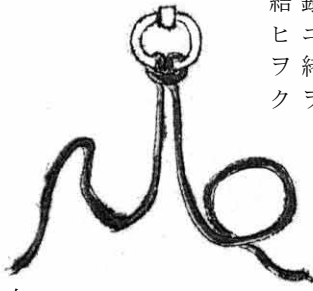
此所ニ矢ノ入
輪皆同

此系シメ結ナレモ見分カタキ
故ニ輪ヲ大キユルク結タル圖也

此所ニ上指ヲサシ糸
ノ兩ハシ真結ニシ又
花結ヒムスヒヲクナ
リ

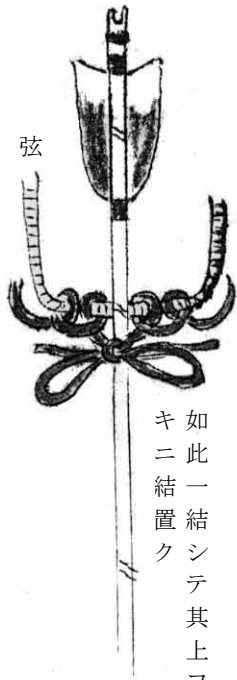
上指ヲ擗タル真向ニ見タル圖

如此鑲ニ緒ヲ
通シ結ヒヲク
ナリ



右同

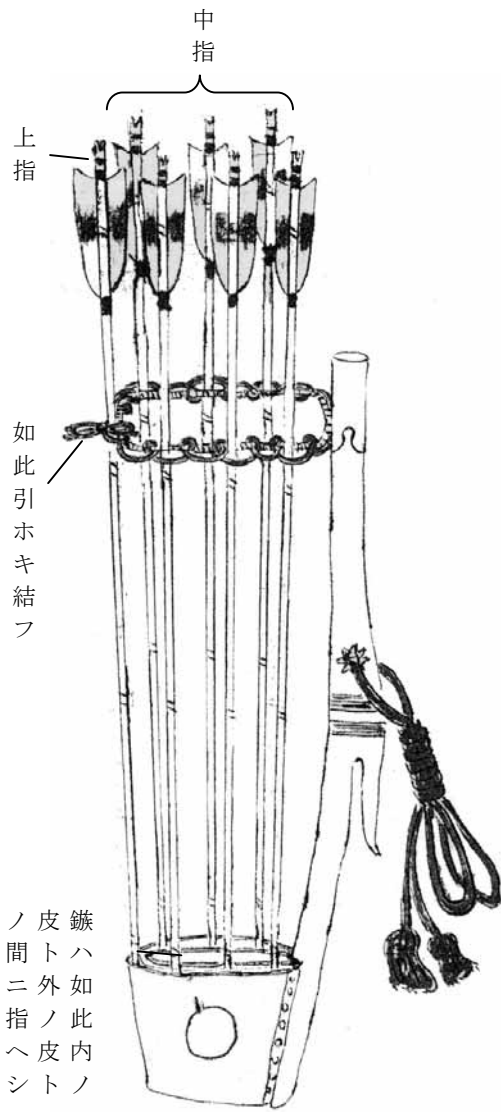
此ハシ流シ



擗緒右ノ圖ノ如シ

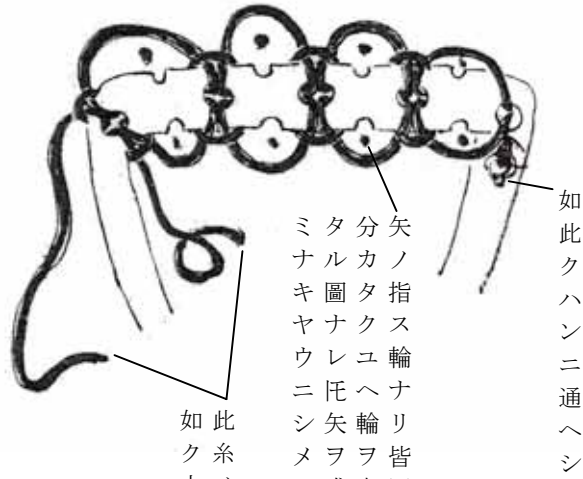
如此一結シテ其上ヲ引ホト
キニ結置ク

矢ヲ擲立タル所



右ニ圖シタルヲ以テ射手矢籠ニ矢ノ擲様ヲ知
ヘシ的場ナトニ矢ヲ擲ミ持時ハ上指ニハ矢代
矢頭ヲ指ヘシ其時ハ矢頭ヲ抜キ別ニ持用シテ
矢籠ニハ矢ハカリ指ナリ又尾花矢籠ノ矢ノ擲

様モ此射手矢籠ニ異ナラスト雖糸ヲ掛タル所
ノ圖ヲ出ス余ハ不可異ト知ヘシ



矢ノ指ス輪ナリ皆同シ圖ニテ見
分カタクユヘ輪ヲ大キクユルミ
タル圖ナレト矢ヲ盛タレハユル
ミナキヤウニシメルナリ

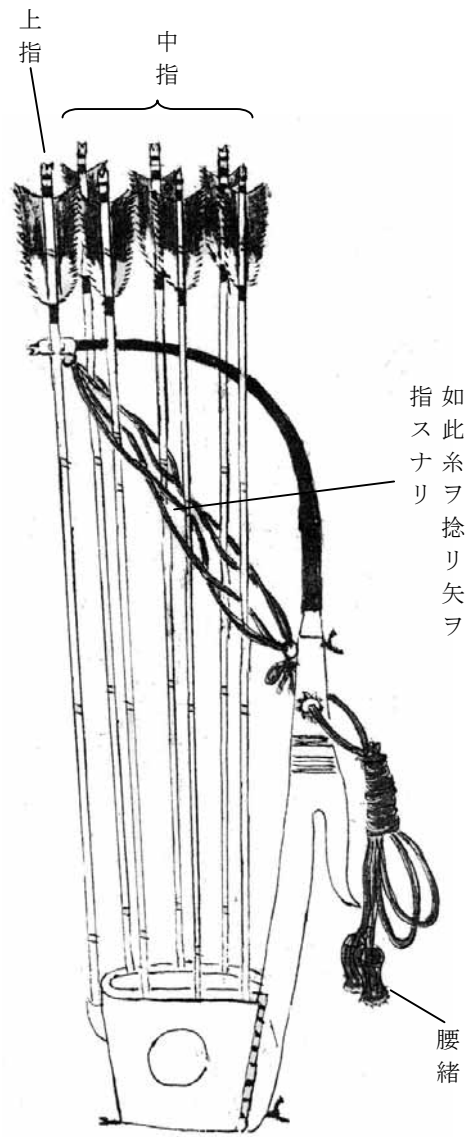
此糸ノ端ニテ射手シコノ
如ク上指ヲカラムヘシ

右ノ圖ハ尾花矢籠ニ糸ヲ掛タル所ナリ此余リ

攸ハ射手矢籠ニ異ナラス但シ此矢籠ニハ上指
ノ根請皮ヲ別ニ設タレハ上指ノ矢先ヲ此皮ニ
指ス迄ノ替リナリ又勿矢籠ノ矢ノ盛様ハ此等
ノ矢籠ノ矢搦トハ異ナリタレハ左ニ圖ヲ出ス



右ノ圖ハ勿矢籠ニ矢ヲ盛り立タル所ナリ如此
 鯨ノ鰭ヲ引曲メタル丈ノ力ニ擲糸ハ延ヒ縮ミ
 アレハ起倒進退ニ矢拔落ル煩ヒアリテ好ムヘ
 キモノニアラス用不用ハ己ニ試タル上ナラテ

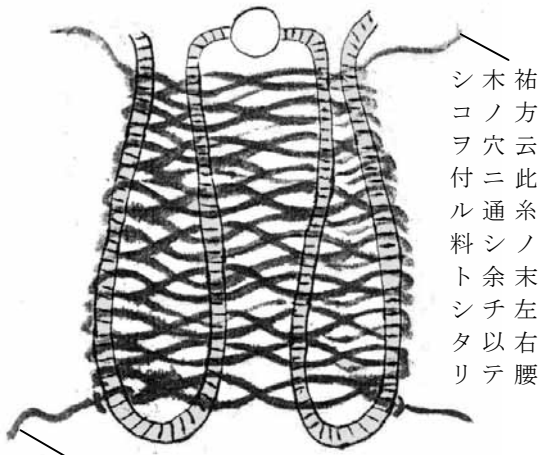


定メカタシ席上ノ利論ト實物ヲ以テ試タルト

ハ思ノ外モノナレハ必シモ今日ノ利論モ以テ

究^{きわむる}ヘカラス 祐方云前章ニ追加シタル異制ノ矢

糸ヲカケタルヲ真向ヨリ見タル所ナリ
去氏元圖見分カタキ所アシハ是改記ス



祐方云此糸ノ末左右腰
木ノ穴ニ通シ余チ以テ
シコヲ付ル料トシタリ

搦糸ハ一筋チカヘニ
上下上下ト四ツノ弦
ニ取チカヘ其糸ノ
間ニ矢ヲサスタメナリ

祐方云此糸ノハシハ
腰木ノ穴ニ通シアリ
左右同シ

弓尻籠付様

流傳曰弓ニ矢籠ヲかざり飭付テ的場ニ持セメムル事

何頃ヨリ始リシニヤ詳ナラス思フニ述京的的

的ナトトノ類也ト云モノ盛ンニ行レシヨリ觀美ヲ好ミ

テ爲シタル叟ナランカ大ニ古クハ勿論足利時

代ノ書小笠原家ノ書ニモ不見いず當孰レ近キ世ノ所爲ト

知ヘシ此的場ニ至ルニ持用セル莊様ハ旅行セ

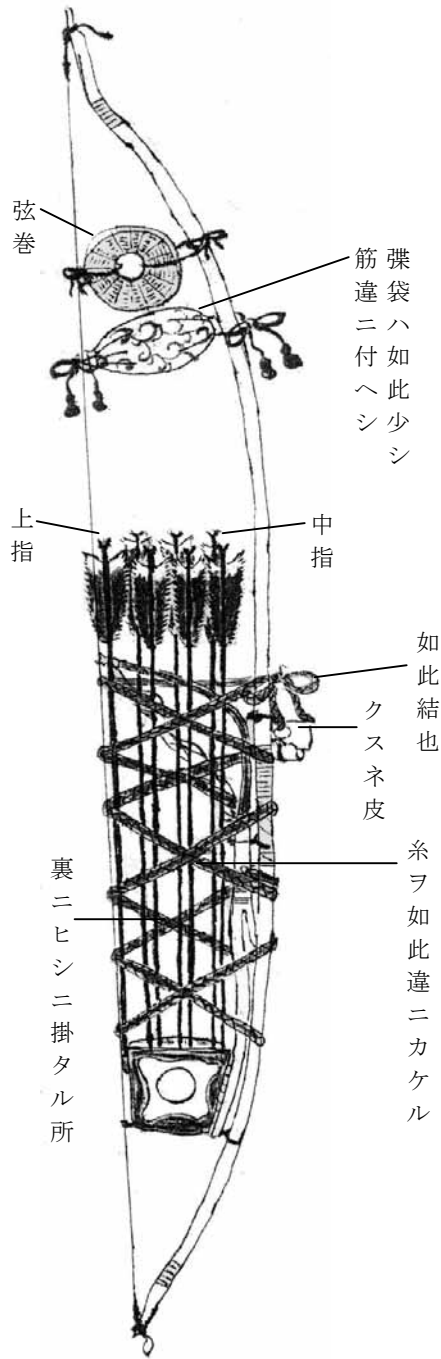
ル時持シムル莊様旅行ノ時弓臺ニ莊様ハトハ

異ナリテ弓臺ナト云モノヲ不用只ニ矢籠ニ矢

ヲ盛タルマヽニテ莊付タルモノ也勿矢籠ニテ

モ尾花矢籠ニテモ何矢籠ニテモ其飭合ヘキ矢
籠ニ前章ノ如ク矢ヲ盛り張弓ノ下ノ成ノ少シ
下ノ邊ニ矢籠ノ根請皮ヲ入レ弓ハ弓挟ニハサ
マセ弦ハ弦挟ニ喰込セ上^ミモ弓挟弦挟ニハサマ
セ腰緒ヲ以テ左右ヨリ取違ヘ弓ト弦ニ菱^{たがい}ニ掛
矢籠ノ働サル様ニ搦ミ余リヲ引解キニ結ヒ留
糸ヲ菱ニ掛タル数不定
大概三菱ホト掛ヘシ 鞞ヲ兩口ノ袋ニ納メ^{なわ}紐
ヲ引トメ一結ヒシテ鳥打ノ辺ニ弓ト弦ニ結付
替弦ヲ弦卷ニ卷テ蝦返ノ下鞞袋ノ上ニ革^{なわ}紐ニ
テ弓ト弦ニ結留ヘシ天胤皮ハ握ノ上カ矢籠ノ

腰木矢搦ノ辺ニ結置タルモ可ナリ委シクハ圖
ニテ知ヘシ此等ノ更ニ定法ナト云更ハアルヘ
カラス兎角見苦シカラサル様セルヲ肝要トス
是レ泰平ノ御代ノ詰構ト云モノニテ元來ハ實
事ヲ失タル更ト知ヘシ



右ノ如ク弓ニ矢籠ヲ付タル圖ハ勿矢籠ナリ尾
花矢籠射手矢籠搦矢籠杯ニテモ此付様ニ異ヘ
カラス

矢筒

遺稿曰此物ハ矢ヲ盛リテ負^レ之合戦ノ庭ニ可持
器ニアラス常射的場ニ己カ随心ノ矢ヲ藏シ可
持爲ノ矢室ナリ其制モ一樣ナラス藪ノ内ニ立
カレニナリタルウキスト云大竹ヲ撰シ其長ハ
人々ノ矢尺ニ應シテ定ナラス大躰三尺五六寸
斗リニスヘシ底ハ桐木ヲ竹ノ内法ニ丸ク切入

漆ニムキ粉ヲマセテ止ル其上ニ練物ヲ以テ地
ヲシテ蠟色ニ塗也蓋モ同ク桐ニテ竹ニ上ヨリ
カムラセ内ハ竹一ハイニタル程ニシテ其蓋裏
ハクルヘシ是ハ輕ク爲サン故ナリ緒通シハ上
ニ蓋ヲキサミ殘シタルモアリ又金物ヲ打タル
モアリ何レニテモ可ナリ緒付ノ環ハ大概蓋キ
ハヨリ三寸斗下ケテ打ヘシ蓋ノ深サハ五六歩
程カフルヲ可トス蓋モ地ヲシテ蠟色ニ塗ナリ
塗色ハ其人ノ所好ニ依テ定リナシ或ハ蓋ヲ引
物ニシタルモアリ引物ニスレハ木理アル木ヲ

用ヒテ唐木ヌリニスヘシ蓋ハ如此制シタリ
底ハ地ヲシテ塗タル強シ其外異ナルヘカラス
緒ハ何色ニテモ好ミニアルヘシ但シ紅ヲ常ト
スヘシ長サ蓋ノ上ニ両締ニ結ヒテ兩方ノ鋳ノ
邊ニ垂ルヲ可シトスヘシ又下地ヲ檜ノ木ノ曲
物ニシテ其上ヲ紙張ニシテ布杯キセテ地ヲシ
テ塗り蒔繪紋所等好ヨリテ付タルモ可ナリ又
蒲柳ニテ編ミ漆ニテ塗リタルモアリ此制古シ
ト聞ヘタルがま本拋正ク見當サレハ如何アルヘ
キヤ尋ヘシ温故之卷ニ圖ヲ出シタレハならべ竝見ル

へし

矢筒抱様

流傳曰矢筒ヲ弓ニ抱サセルハ空穂ヲ弓ニ付ル

如ク臺ヲ作

此臺モ空穂ノ
臺ト同制ナリ

リ其臺ニ矢筒ヲ抱セ^サ

是ヲ又弓ニ抱サセ上下ヲ弓挟弦挟ニ挟セ置タ

ルモノニテ空穂ヲ弓ニ付タルニ大様異ナラス

矢筒ニハ矢代箭ヲ中ニ入タルモノナリ空穂ニ

ハ中ニ不入真蓋ノ上ニ顕シテ指ナリ是レ上矢

ヲ顕テ指スト中ニ藏シテ指ストノ差別ニテ其

外ハ異ナルヘカラス依テ爰ニ^{こゝ}ハ圖ヲ顕ス空穂

弓ニ付様ト互見シテ考ヘシ

空穂

流傳曰空穂ハ治乱兼用ノ矢室ナリ源平盛衰記
鷲尾三郎一谷案内ノ条ニ柳ノ衣物ニ同色ノ袴
節卷ノ弓ニ猿皮ノ鞆鹿矢アマタ指テ半物草ヲ
ソハキタリケル平家物語瀬尾最後ノ条ニ布ノ
小袖ニアツマヨリシヤフレ腹卷ツカリキ山空
穂タカ箆ニ矢託少々サシカキヲヒくツカウ其
勢二千余人セノオカタチヘハセアツマル太平
記楠正行最後ノ条ニ九国ノ住人須々木四郎ト

テ強弓ノ矢繼早三人張二十三束二丈百歩二柳
ノ葉ヲ立テ百矢ヲ外サヌ程ノ射手ノ有ケルカ
人ノ解キ捨タル箒竹尻籠卷ヲ搔マリ斗取集テ
雨ノ降如ク矢坪ヲ差シテソ射タリケルト見ヘ
タリ此等ハ戰場ニ用ヘタル事跡ナリ又後三年
合戦ノ画一、谷合戦ノ画ニモ空穂付タル武者数
多繪書タリ合戦ノ庭ニ矢ヲ盛テ所用セルハ勿
論ノ矢室ナリ又戦ナラサル平和ノ時モ用ヘタ
ル矢室ナリ弓馬故實ニ弓上にてうつほの上に
矢頭さすへき事数は三二一もさすへし但宿老

は一ツさしたるもふし若き人も一ツさしたる
はいたりたるやう也鞭を身寄にさして矢頭を
そこにさすへしうつほの真中に有様にさすへ
し三の時ははや二ツ又二ツの時ははやおとや
一ツの時ははやをさすへし又矢頭をさゝすし
て鞭斗さす時はそれも鞭をうつほの上に成様
にさすへし又矢頭をうつほの上にさゝすして
うつほの内に差す事なし但畧義にはさも有へ
きかト云云射御拾遺抄ニうつほの上にしんと
うさす事三五なるへし二ツはさすへからすた

とひ二ツさすともむちをさしそへてくるしか
らす高忠聞書二うつほの上にしんとうさすへ
き事二もさすへし鞭をさしそへへき也むちを
さゝすしてしんとう一手さす事あるましき也
又しんとう三もさすへき也四さす時はむちを
さしそへへしむちをさゝすして四さす事有ま
しき也又神頭一さして鞭をもさす也まとへ神
頭をさゝすともむちはさすへき也うつほを付
てむちをさゝぬ事はあるましき也能く心得へ
しまとへむちをさすとも神頭六さす事有へか

らすむちをは必さすへき事なれともしせん神

頭斗さす時は神頭一三五なとさすへし神頭二

四六なとはむちをさゝてさす事有ましき也ト

見へタリ足利殿ノ頃ノ武士ノ風俗ニテ合戦ノ

時ナラス平生ニ馬上歩立ニテ歩行セル時自ラ

空穂ヲ付テ帯ニ神頭鞭ヲ指ソへ或ハ従者ニ空

穂ヲ付サセル時モ矢頭鞭ヲ指セタリ此ヲ腰指

ノ矢頭ヲ云ナリ 祐方云矢頭鞭ヲ空穂ノ中ニ不
指帯ニ指ソヘル事ハ何故ニ如

此爲タルニヤ詳ナラス鞭ハ馬ヲ御スルニ己カ

心ニ不叶時ハ鞭打シテ心ノマヽニ馬ヲ立横ナ

文字ニ走ラセルノ用具ナレハ空穂ニ入へキモ

ノニアラス帯ニ指シテ持事實利ニ當タリ矢頭

ヲ上ニ指ハ何ノ利用アリテ指シタルニヤ急変
ノ用ヲカ、ンタメ帯ニ指スナレハ根矢ノ類ヲ
指スヘキナリ又矢先太キテ空穂ノ中ニ指ス事
煩シトセハ鏑矢ヲサス事ナラス鏑矢ヲ四季ニ
指分ル夏高忠聞書別記ニ見ヘタレハ先ノ太キ
矢ヲモ指ス夏ナレハ左ニモアラス今當其用絶
タレハ知タルモノマレナリ又矢頭ニカキラス
木棒四目ナトモ腰指ニスルナリ則高忠聞書ニ
きほうなとさす時は神頭さすと同心得なりト
アリ又同書ニ四目ヲハウつほの上にもさすへ
きなり又小者中間にもさゝすへし数はしんと
う同事也弓馬故實ニ四目をうつほの上になさ
事なし但これも野山などにて晴の時にてなく
はくるしからす御供などの時は無用なりト見
リヘタサレハ治世ニ用タル明證トスヘシ今當モ

旅行セル時弓臺ニ組合セテ持シメ或ハ的場ニ

至ル時弓ニ飭付テ用ユル夏モアレハ治乱兼備

ノ矢室ナル事ヲ知ヘシ其製モ種々異品アリテ
一様ナラスト云凡温故之卷鬪射之卷等ニ委シ
ク評シタレハ此所ニハ畧ス互見スヘシ

空穂弓ニ付様

流傳曰此條ニ述ル所ノ空穂ヲ弓ニ組合テ飭弓
トセルハ旅行セル時弓臺ニ弓空穂ヲ組合莊付
タルトハ別ニテ或ハ御所的ノ時其外孰ノ的場
ヘモ宿元ヨリ至ン時途中ヲ持シム莊様ナリ其
莊様ハ朴ノ木ニテ矢筒ノ臺ノ如ク物ヲ作り空
穂ニ矢ヲ盛リ

矢数不定其人ノ覺悟ニアリ
先ハ七十九ナルヲ常トス 真蓋

シテ此臺ニ抱ヘサセ矢代神頭ハ中ニ不差空穂

ノ上ニ頭シテ母衣付ノ環ニ指通シ打糸打糸ハ

ヲ筆軸位長サハムメヲ以テ結留其余リテ梅ノ

花或ハ蝶又ハ蜻蛉ナトニ結ヒテ下ケ置ナリ矢

尻ハ矢頭ヲ拔キ真蓋ヲ掛皮ノ間ニ指通シ空穂

持ノ金物ニ持セ圖ノ如ク弓ニ抱ヘサスルナリ

蹠ハ矢籠弓ニ付タル如ク袋入鳥打邊ニ結ヒ付

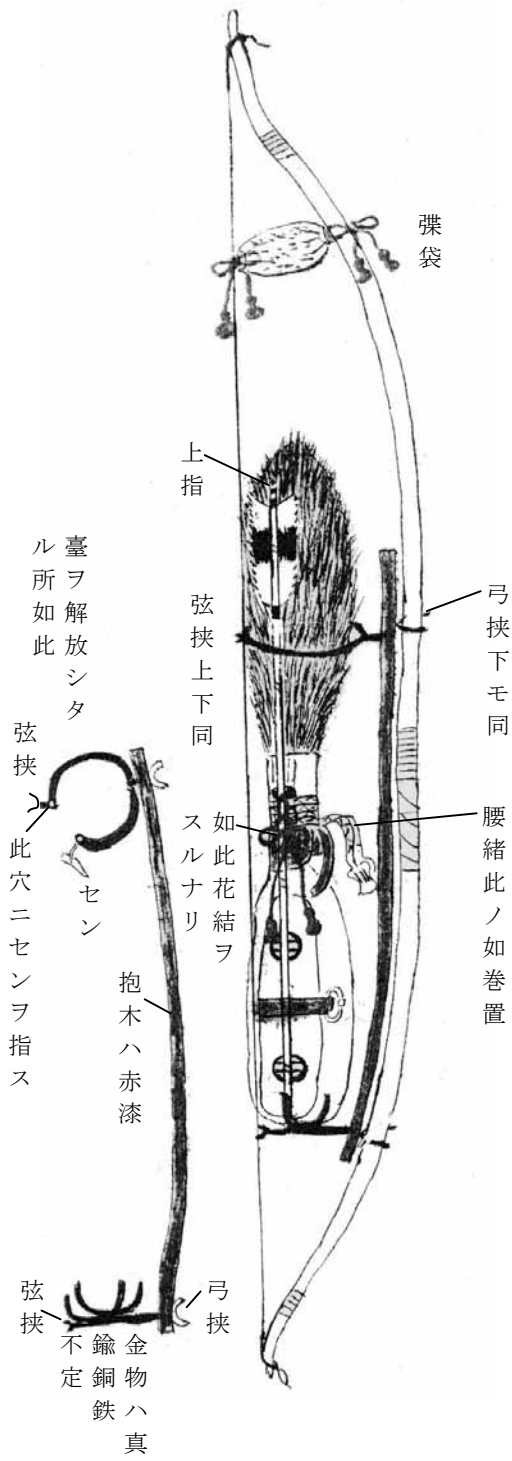
替弦ハ真蓋ノ裏ノ弦袋ニ納ヘシ此弦袋ナキ空

穂ナレハ弦卷キニ卷テ蹠袋ノ上ニ小キ革紬ニ

テ弓ト弦ニ結留ナリ余ハ人々ノ好ミニ任セ何

ト成トモ莊付ヘシ定法ナトハ決テアルヘカラ
 ス勿論近世ノ所爲ニテ古キ伎ニハ不可有ト知
 ヘシ

弓ニ空穂組合タル圖



土俵空穂

流傳曰土俵空穂ト云モノハ竹ヲ小ク割リ巡リ
一抱ホトノ駕籠ヲ編ミ金箔ヲ置キ腰ヨリ下ハ
シホ革ナトニテ包ミ漆ニテ黒クヌリ或ハ青漆
ニヌリタルモアリ所好ニヨリ何色ニモ塗ヘシ
腰皮根皮掛皮モ黒クヌリ或ハ金箔ヲ以テ模様
ナト置タルモアリ一樣ナラス腰緒ハ練クリノ
八打糸太巡^ツニテ二寸斗長^サ不定大概一丈二三尺
余リ鹿物ニハ木綿ノ八打^ツヲ用ヘタルモアリ^{ほろ}纒
付鑲ハ一重座切巡リ或ハ表菊裏菊ニミサミ二

重座ナルモアリ下地ハ銅ニテ銀焼付或ハ真鍮
ニクロメ火色ナト好ニ任スヘシ竈ノ巡リノ縁
ハ割藤ニテ卷キ竈ノ内ニハ矢配ノサナヲ付ケ
タリ真蓋モシホ皮ニテ包ミ腰ト同色ニタリ紋
所ヲ金箔ニテ置キ小持さげ(弄)ニテ掛弛ニシテ裏ニ弦
袋ヲ付タリ惣躰常ノ空穂ノ大ナル迄ニテ其制
異ナラス此物ハ矢ヲ数多入レ旅行セル時ナト
中間小者ニ肩カシメ用意ノ矢ヲ持シムル矢室
ニテ素ヨリ腰ニ帯ルモノニハアラズ武隠叢話
ニ小田原陣ノ時秀吉公ハイトヒオシノ御鎧唐

冠ノ御曾糜斗付ノ御太刀ニ振御ハキ金ノ土俵
ウツホノ上ニ征矢一筋サシ是ヲ腰ニ付作り髭
ヲ付ラレタリトアリ是レハ秀吉公異形ノ出立
ヲ好ミ態ト太刀ニ振佩リキ作髭ヲ掛ケ腰ニ付ル
矢房ニハアラサルトモ此土俵空穂ヲ付ラレタ
ルナリ秀吉ノ風雅ノ出立ノ事跡ヲ見テ土俵空
穂モ腰ニ付ルモノト思フヘカラス大ナル僻事ひがごと
ナリ必シモ腰ニ帶スル矢室ニハアラス迷フヘ
カラス又此モノ大ニ古クハ不見當岡本記ニう
つほにとひやうなと、申候もなしト見ヘタリ

此書ノ卷尾ニ天文十三年十二月三日岡本美濃
守縁侍トアリ岡本美濃守ハ小笠原家ノ弟子ニ
テ足利義晴將軍ノ時代ノ人也秀吉公小田原陣
ハ天正十八年ナレハ五六十以前ナリ此頃世
ニハ土俵空穂ト云モノ存在シタレハコソトヒ
ヤウナト、申候モナシト記シケレト小笠原家
ニテハ用ヘサルモノナレト土俵空穂ノアリタ
ル事ハ明ナリ其始ハ詳ナラス猶能ク知ラン人
ニ尋ヘシ祐方云射法一統ニ土俵空穂ノ圖ヲ挙
テ側ニ毛ツキノ皮ニテスルトモ評シ
タレト毛皮掛タル土俵空穂見
及タル叟ナシ如何可存ヤ可尋

土俵空穂ノ圖

此所ヲ惣躰種ト云小キ割
竹ニテアミ金伯ヲ置タリ

腰革黒クモ青
クモヌリ金伯
ニテ紋ヲカキ
タルモアリ

根皮腰皮ニ同

腰緒色不定

此クハン
ニカケカ
ハノ輪ヲ
カケル

竈巡リワリ
藤ニテ卷ク

矢配ノサナワリ
竹ニテスルナリ

カラド、云
幌付クハン

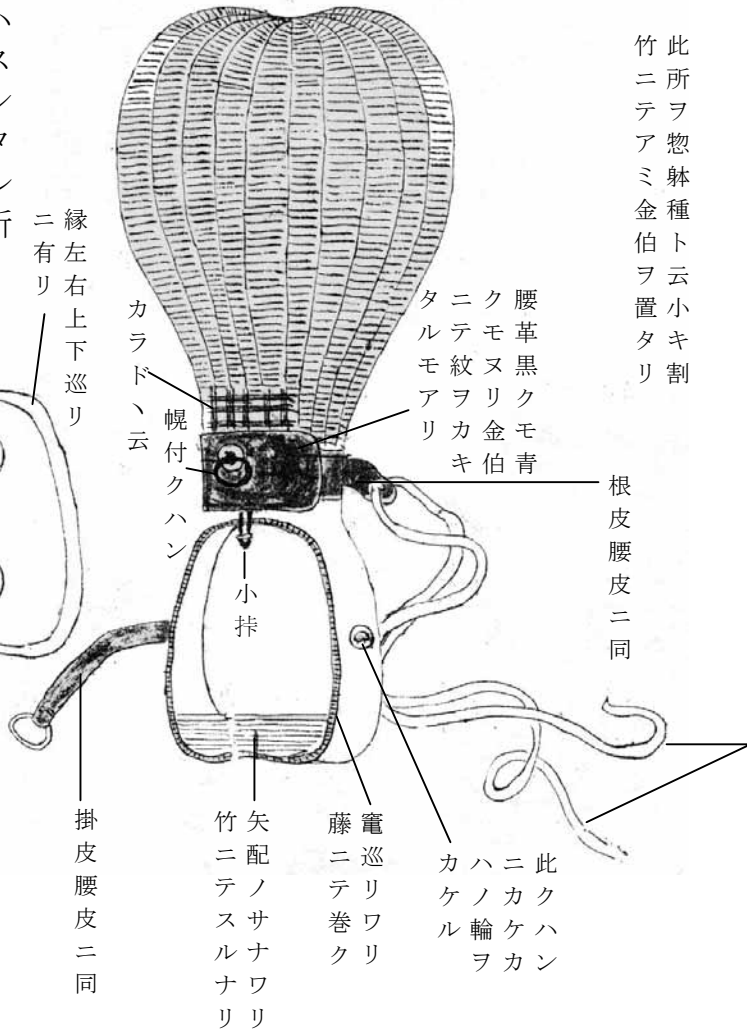
掛皮腰皮ニ同

縁左右上下巡リ
ニ有リ

小持
紋所ハ金ニテ上下ニ
付ヘシ

此裏ニ弦袋アリ

真蓋ヲハスシタル所
如此シホ革ニテ色ミ
黒クモ青クモ塗ル
腰ヨリ下ト同制ニス
ヘシ



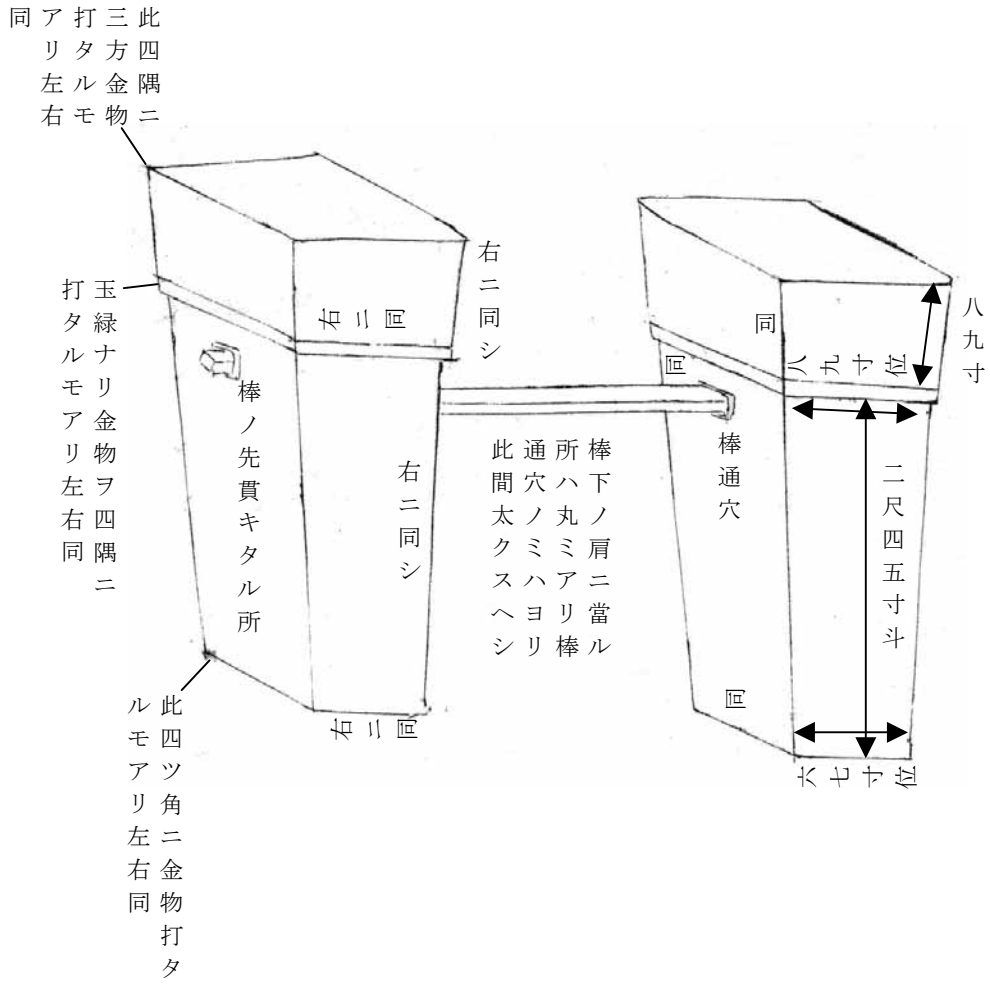
荷矢箱

流傳曰荷矢箱ト云モノハ温故之卷ニ述タル矢
櫃トハ別物ニテ矢ヲ数多入シテ奴僕ヲシテ荷
シムル箱ナレハ斯ハ云ナリ素ヨリ近世ノ雜具
ナレハ小笠原家ノ古書類ニ不見當定制ナトア
ルヘカラス桐ニテモ檜すぎ杓ニテモ厚サ五六分板
ニテ高サ大概二尺四五寸位口ノ廣サ八九寸四
方底ノ指渡シ口ノ寸ヨリ二寸斗狭クスヘシ是
ニテ大躰恰好セリ口ニ蓋持ノ料ノ玉縁ヲ四方
打此玉縁ヨリ三寸斗リ下ニ棒通シノ穴ヲ突通

二明ヶ棒ハ兩掛ノ棒ノ如シ又蓋ハ被蓋ニシテ
深サ八九寸位廣サハ箱ノ口ノ廣ニ順ヘシ塗ハ
漆ニテ黒クモ赤クモ塗ヘシ鹿物ニ至テハ煤ス
リニシタルモアリ二一^リ對ニ作りタル立長キ箱
ナレハ一名立矢箱トモ呼タリ射法一統ニ圖ヲ
出シテ蓋ノ廣九寸四方深サ九寸箱ノ長ハ二尺
二寸底ノ廣サ七寸四方ト記タレトモ淺深廣狭
ハ所好ニヨリ定寸アルヘカラス兎角手輕持巡
リ便利ニシテ矢ノ出入安ラカナルヲ可トスヘ

シ

荷矢箱圖



祐方云右立矢箱ノ中ニ厚サ一分半位ノ板

ニテ格子ヲ組テサナヲ入タルモ可ナリ